

## 中学生の犯罪報道ストレスと心理的ストレス過程の検討

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 松田 侑子

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 永作 稔

筑波大学心理学系 新井邦二郎

An exploratory investigation of the crime reporting stressor and the processes of psychological stress in junior high-school students

Yuko Matsuda, Minoru Nagasaku and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is (a) to construct a stressor scale for crime reporting and to examine its reliability and validity, and (b) to investigate the processes of psychological stress in junior high-school students in terms of psychological stress theory (Lazarus & Folkman, 1984). A questionnaire consisting of the crime reporting stressor scale of 12 items, confirmed in a pilot study, a cognitive evaluation scale, a coping scale, and a stress response scale were administered to 307 junior high-school students. The results of analysis indicated that the new scale has a single-factor structure, with satisfactory levels of reliability and validity. While not numerically very high, a significant correlation was found between the crime reporting stressor scale and the stress response scale ( $r = .18, p < .01$ ). Finally we discuss some issues for future research.

**Key words:** crime reporting stressor, psychological stress process, junior high-school students

### 【問題と目的】

近年、我が国では少年犯罪・非行の問題が深刻化している。平成13年以降増加しつづけてきた刑法犯少年の検挙人員は、平成16年に前年と比べて6.6%減少したものの、人口比（同年齢層人口千人あたりの検挙人員）に関しては16.8%であり、成人（2.5%）の約6.7倍となっている（警察庁生活安全局少年課, 2005）。更に、犯罪・非行の低年齢化や凶悪化など、その質における変化も大きな問題として取り上げられており、少年の非行防止・保護の面で憂慮すべき状況にあるといえる。また、平成16年に行われた内閣府の「治安に関する世論調査」（2004）によると、ここ10年で日本の治安が悪くなったと思う人が9割近くに達し、8割以上の方が自分や身近な人が犯罪に遭うかもしれないという不

安を抱えていること、近年の犯罪傾向に関して「低年齢化」をあげる人が最も多いこと（81.8%）が示されている。このような社会的な変化・人々の犯罪に対する不安感を背景にして、少年の手による犯罪・非行に関する報道をテレビや新聞などを通して知る機会は多くなったといえる。こうした少年犯罪・非行の報道に暴露する体験は同世代にあたる中学生にも何らかの影響を与えていると考え、本研究ではそれをストレスという観点から捉えていくことにする。

池上・井上（2002）は、中学生は家庭及び学校ストレスだけでなく社会的ストレスにも強く反応し、社会全体に対する不満や不安が、強いストレス源になっていると指摘し、従来中学生を対象としたストレスの研究（嶋田, 1998など）で焦点化されてきた学校生活にストレス源が限局されないこと

を示している。またここから、中学生の意識は学校や家庭といった直接体験しうる身近な生活空間だけでなく、メディア等を通して間接的に体験される社会に対しても開かれていると考察されている。よって、同世代の犯罪・非行についての報道をテレビや新聞などを通して知ることも、中学生にとってはストレスサーとして作用しうるものが十分考えられる。

これまで、犯罪・非行が中学生に与える影響に関しては、日常生活のストレスが犯罪・非行行動につながることを明らかにした研究がある（大木・神田，2000）。しかしながら、同世代による犯罪・非行を見聞きすることとストレスとの関係を扱った研究は見当たらない。従って、メディアによる同世代の犯罪への暴露と中学生のストレス反応との関係を調べることは意義があるだろう。

従来、ストレスについては多くの研究が行われており、様々なストレスモデルが構築されてきた。現在、ストレスに関する理論的研究の中心的な役割を担っているのが Lazarus ら（1984）のトランスアクション理論である（加藤，2005）。そこでは心理的ストレスの過程を、①外界の刺激であるストレスサーとそれを脅威的と認知的に評価すること、②それらのストレスサーに対処すること、③その結果生じるストレス反応、という大きく3つの成分から構成されていると捉えている。そしてさらに、認知的評価は一次的評価と二次的评价に分けられるとする。前者は、環境からの刺激が自分とは無関係であると見なすか、無害（肯定的）なものか見なすか、あるいは有害（喪失的、脅威的、挑戦的）なものか見なすかという評価であり、後者は、環境からの刺激が自分にとって有害であると認知された場合、それらから喚起される心理的ストレス反応を軽減することができるかどうかの判断、あるいはそれを軽減するための対処行動の選択に関する評価をいう（嶋田，1998）。つまり、環境からの刺激（ストレスサー）を認知的に評価し、それに対する対処行動を行った結果、ストレス反応を表出するという一連の過程でストレスを捉えたのである。

このようなストレスモデルは、心理的ストレスの生起メカニズムを包括的に理解するという役割と、ストレス反応の軽減を目的とした介入（ストレスマネジメント）の有効な手がかりとなるという役割を担っている（嶋田，1998）。特に後者については、具体的な援助をするためにどういった点に留意して介入を行っていけばいいかを明らかにしていくうえで重要である。嶋田（1998）は、このモデルを学校ストレスの説明に用い、学校ストレスサー、認知的

評価、コーピングの組合せという枠組みで、中学生の心理的ストレス過程を説明できることを明らかにしている。そこで、本研究では嶋田（1998）と同様に、Lazarus & Folkman（1984）のストレスモデルに従って、犯罪・非行に関する報道を見聞きすることをストレスサーとした、中学生の心理的ストレス過程を検討していくこととした。具体的には、まず尺度の作成を行い信頼性と妥当性を検証する。次にそのストレス過程を検討し、中学生が同世代の子どもによる犯罪・非行に対し、どのように評価し、対処しているか、また犯罪・非行の報道がストレス反応とどのように関係しているかを明らかにする。そしてこれらの結果に基づいて中学生に対する援助の可能性を探索的に検討することを目的とする。

## 予備調査

### 【方法】

**調査対象者：**県内の公立中学校の1～3年生90名、I県内の大学生65名。

**調査内容：**実際に周囲で起きた同世代による犯罪・非行を見聞きした経験、同世代による犯罪・非行に関する報道について自由記述で回答を求めた。その後、発達心理学・臨床心理学を専攻する大学院生2名、心理学を専攻する大学生4名が、KJ法を用いて項目の精選を行った。さらに、同世代による犯罪・非行に関する報道を見聞きしたことにより不安・ストレスを感じたことがあるかどうかについて、「はい・いいえ」の2件法で回答を求めた。

### 【結果】

自由記述によって得られた項目をKJ法により分類・整理した結果、12項目の犯罪報道ストレスサー原尺度項目が準備された。また、約30%の中学生が同世代による犯罪・非行に関する報道に対してストレスや不安を感じていること、大学生の約62%が中学生のときに、同世代による犯罪・非行に関する報道に対してストレスや不安を感じていたことが明らかにされた。

## 本調査

### 【方法】

**調査対象者：**F県内の公立中学校の2，3年生307名（男子166名，女子141名，平均年齢14.04±0.8歳）を対象とし、クラスごとの一斉法により無記名方式で実施した。

**調査日時：**2004年9月

## 調査材料

- ①犯罪報道ストレス尺度：予備調査によって得られた12項目について、「この1ヶ月の間に、次のような出来事があったにどのくらいありましたか」という教示の下、「全くなかった(0)」から「よくあった(3)」の4件法で回答を求めた。
- ②中学生用認知的評価尺度(嶋田, 1998)：これは11項目からなり、「影響性」「コントロール可能性」という2つの因子から構成されている。「このようないやな出来事に対して、あなたはどのように感じたり、考えたりしましたか」という教示の下、「全くしなかった(0)」から「よくした(3)」の4件法で回答を求めた。
- ③中学生用コーピング尺度(嶋田, 1998)：これは16項目からなり、「積極的対処」「諦め」「思考回避」という3つの因子から構成されている。「このようないやな出来事があった時に、あなたはどのようなことをしたり、考えたりしましたか」という教示の下、「全くしなかった(0)」から「よくした(3)」の4件法で回答を求めた。

- ④中学生用ストレス反応尺度(嶋田, 1998)：これは24項目からなり、「不機嫌・怒り感情」「抑うつ・不安感情」「身体的反応」「無気力」という4つの因子から構成されている。「次に書いてある気持ちや体の調子は、このごろのあなたにどのくらい当てはまりますか」という教示の下、「全く当てはまらない(0)」から「とても当てはまる(3)」の4件法で回答を求めた。

## 【結果】

## 因子分析

犯罪報道ストレス尺度の因子構造を明らかにするために因子分析を行った。その結果、スクリー基準により1因子が妥当であると判断した。これを踏まえて主成分分析を行ったところ、全ての項目が.35以上の負荷を示したため、項目の全てを分析対象とし、因子得点を算出した。結果をTable 1に示す。その他の尺度に関しては、それぞれの下位尺度の合計得点を分析に用いた。

Table 1 犯罪報道ストレス尺度主成分分析結果

犯罪報道ストレス尺度項目 ( $\alpha = .88$ )	因子負荷量	共通性	項目平均	標準偏差
3 小中学生が人を殺そうとしたり傷つけたりした事件の報道を見たり聞いたりした	.74	.55	1.51	1.01
7 小中学生による恐喝、かつあげ事件の報道を見たり聞いたりした	.73	.53	.58	.76
5 出会い系サイトがきっかけで起こった事件の報道を見たり聞いたりした	.72	.52	.86	.92
2 小中学生が人を殺してしまった事件の報道を見たり聞いたりした	.71	.50	1.75	.99
6 集団での暴力事件の報道を見たり聞いたりした	.70	.49	.86	.90
9 小中学生による万引きや盗みの事件の報道を見たり聞いたりした	.69	.48	.57	.75
4 小中学生がナイフなどの刃物を持ち歩いたり、それで人を傷つける事件の報道を見たり聞いたりした	.69	.48	1.16	.95
8 小中学生が警察に逮捕されたり補導されたりする事件の報道を見たり聞いたりした	.67	.44	1.21	.98
1 いじめによる自殺が報道されているのを見たり聞いたりした	.63	.40	1.12	.97
10 小中学生による事件の被害者や被害者家族の報道を見たり聞いたりした	.60	.36	1.44	1.05
12 小中学生が薬物や覚醒剤を使用しているという報道を見たり聞いたりした	.59	.35	.34	.62
11 小中学生による犯罪・非行が報道されることで周りの人たちから自分も同じように見られた	.38	.15	.18	.50
因子負荷量二乗和	5.23			
寄与率	43.60			

### 信頼性の検討

犯罪報道ストレス尺度について、まず信頼性を検討するためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果 $\alpha = .88$ であり、信頼性が十分に高いことが確認された。

### 妥当性の検討

構成概念妥当性を検証するために犯罪報道ストレス尺度における因子得点と、中学生用ストレス反応尺度の素点の合計得点との相関を算出した。その結果、 $r = .18$  ( $p < .01$ ) で正の相関が得られ、ある程度の妥当性が確認された。さらに、内容的妥当性を確認するために現役の中学校教諭10名に本研究で使用した尺度項目が妥当であるかどうかについて評定を求めた。評定は「妥当である」「まずまず妥当である」「あまり妥当ではない」「妥当ではない」の中から一つ選ぶという形式で行った。その結果、項目10を除いた11項目については過半数以上の中学校教諭が「妥当である」または「まずまず妥当である」としたため、内容的妥当性があると判断した。項目10に関しては、項目10の得点とストレス反応得点との相関係数を算出した結果、 $r = .12$  ( $p < .01$ ) と有意な正の相関が得られ、他の項目内容と比較しても大きな差がないと判断されたため、項目10についてもある程度妥当性があると判断し、以下の分析に用いることにした。

### 相関分析

犯罪報道ストレスとストレス反応との関連を検討するため、相関分析を行った。分析には、犯罪報道ストレス尺度の因子得点と各ストレス反応下位尺度の尺度得点を用いた。その結果をTable 2に示す。「犯罪報道ストレス」は「不機嫌・怒

り感情」と $r = .16$  ( $p < .01$ )、「抑うつ・不安感情」と $r = .21$  ( $p < .01$ )、「身体的反応」と $r = .18$  ( $p < .01$ )の正の相関があった。また、4つのストレス反応の得点を足しあげた総得点と「犯罪報道ストレス」の相関は $r = .18$ で有意であった( $p < .01$ )。しかしながら、全体的に相関関係は強くはなく、犯罪報道によるストレスとストレス反応には関連があるものの、その強さはさほど大きくないことが示唆された。さらに、関係をより詳細に検討するために、各項目ごとにストレス反応との相関を求めた。その結果をTable 3に示す。項目5においては4つのストレス反応、ストレス反応全体との相関がすべて有意であった。

### パス解析

「犯罪報道ストレス」がどのような過程を経てストレス反応につながるのかについて検討するため、パス解析を行った。本研究では、Lazarus & Folkman (1984)、嶋田 (1998) のモデルに基づいて、犯罪報道ストレス、認知的評価、コーピング、ストレス反応という流れでパス解析を行った。分析において、犯罪報道ストレス尺度は因子得点を、その他の尺度は各下位尺度得点を用いた。その結果をFig. 1に示す。犯罪報道ストレスと「不機嫌・怒り感情」( $\beta = .19$ ,  $p < .01$ )、「抑うつ・不安感情」( $\beta = .18$ ,  $p < .01$ )、「身体的反応」( $\beta = .15$ ,  $p < .05$ )の間で有意な関連が見られ、犯罪報道ストレスが高くなるほど、これらのストレス反応が高まることが示された。また「コントロール可能性」と、「抑うつ・不安感情」( $\beta = -.13$ ,  $p < .05$ )、「身体的反応」( $\beta = -.16$ ,  $p < .01$ )の間で有意な関連が見られ、コントロール可能であるという認知的評価を行うほど、これらのス

Table 2 犯罪報道ストレスと認知的評価、コーピング、ストレス反応との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 犯罪報道ストレス											
2 影響性	.24**										
3 コントロール可能性	.15**	.32**									
4 積極的対処	.30**	.39**	.28**								
5 諦め	.03	.06**	-.02	.05							
6 思考回避	.09	.08	-.03	.12*	.54**						
7 不機嫌・怒り感情	.16**	.00	-.04	-.03	.17**	.13*					
8 抑うつ・不安感情	.21**	.12*	-.06	.11*	.24**	.14*	.64**				
9 身体的反応	.18**	.14**	-.08	.13*	.16**	.06	.62**	.61**			
10 無気力	.07	.06	-.05	.00	.27**	.14*	.62**	.58**	.59**		
11 ストレス反応尺度総得点	.18**	.09	-.07	.06	.25**	.14*	.87**	.84**	.84**	.82**	

注) \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 3 犯罪報道ストレス尺度の各項目とストレス反応との相関

	イライラ	抑うつ不安	身体的反応	無気力	ストレス反応
1 いじめによる自殺が報道されているのを見たり聞いたりした	.05	.13*	.11	-.03	.08
2 小中学生が人を殺してしまった事件の報道を見たり聞いたりした	.08	.08	.05	-.04	.05
3 小中学生が人を殺そうとしたり傷つけたりした事件の報道を見たり聞いたりした	.10	.15**	.11	.07	.12*
4 小中学生がナイフなどの刃物を持ち歩いたり、それで人を傷つける事件の報道を見たり聞いたりした	.08	.13*	.10	.04	.10
5 出会い系サイトがきっかけで起こった事件の報道を見たり聞いたりした	.20**	.28**	.25**	.14**	.24**
6 集団での暴力事件の報道を見たり聞いたりした	.13**	.15**	.15**	.04	.14*
7 小中学生による恐喝、かつあげ事件の報道を見たり聞いたりした	.04	.12*	.11	.04	.09
8 小中学生が警察に逮捕されたり補導されたりする事件の報道を見たり聞いたりした	.19**	.15**	.11	.08	.16**
9 小中学生による万引きや盗みの事件の報道を見たり聞いたりした	.10	.09	.10	.01	.09
10 小中学生による事件の被害者や被害者家族の報道を見たり聞いたりした	.12*	.10	.12*	.05	.12*
11 小中学生による犯罪・非行が報道されることで周りの人々から自分も同じように見られた	.12*	.14*	.07	.09	.13*
12 小中学生が薬物や覚醒剤を使用しているという報道を見たり聞いたりした	.10	.18**	.13*	.11	.15**

注) \*p < .05 \*\*p < .01

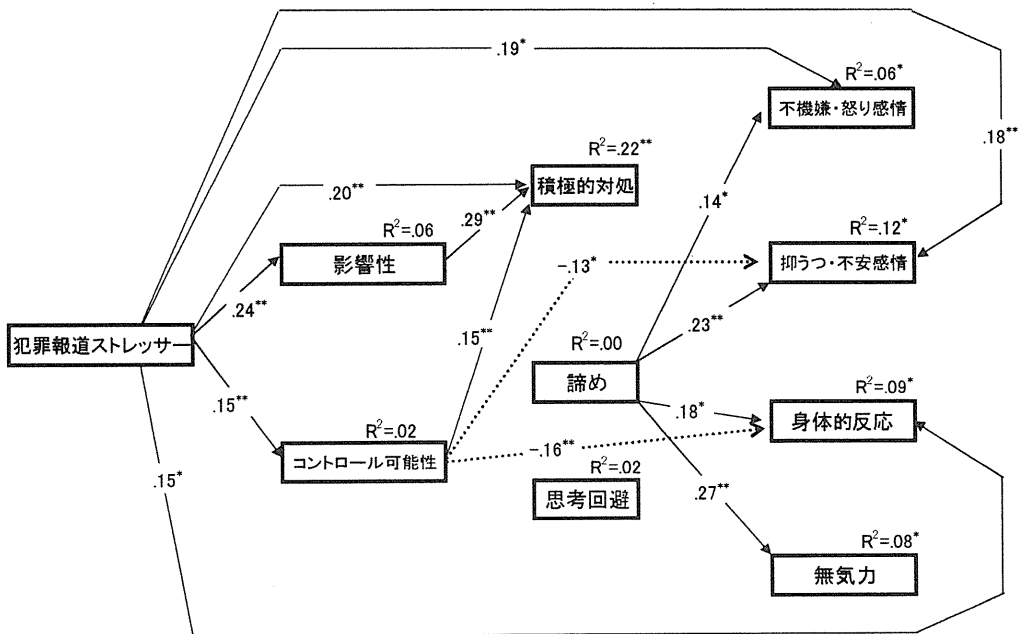


Fig. 1 犯罪報道ストレスからストレス反応へのパス・ダイアグラム

注) \*p < .05 \*\*p < .01

トレス反応が低くなることが明らかとなった。「諦め」からは、「不機嫌・怒り感情」( $\beta = .14, p < .05$ )、「抑うつ・不安感情」( $\beta = .23, p < .01$ )、「身体的反応」( $\beta = .18, p < .01$ )、「無気力」( $\beta = .27, p < .01$ )のストレス反応全てについて有意なパスが見られた。

### 【考 察】

本研究の目的は、犯罪報道ストレス尺度を作成し、中学生が同世代の子どもによる犯罪・非行に対し、どのように評価し、対処しているか、また犯罪・非行の報道がストレス反応とどのように関係しているかを明らかにすることであった。これについては相関分析の結果から、「犯罪報道ストレス」と「不機嫌・怒り感情」「抑うつ・不安感情」「身体的反応」のストレス反応には正の相関があり、ストレス反応全体と「犯罪報道ストレス」にも正の相関があることが見出された。また、犯罪報道ストレス尺度の各項目と、ストレス反応との関連を調べた結果、項目5については全てのストレス反応と有意な相関が見られた。「出会い系サイトがきっかけで起こった事件の報道を見たり聞いたりした」という項目5の内容は、今日の中学生において携帯電話を持っていることがそれほど珍しいことではなくなってきていることに関連して、このような事件に対してより身近に感じるようになってきているのかもしれない。

また、パス解析の結果からも「犯罪報道ストレス」が高まるほど、「不機嫌・怒り感情」「抑うつ・不安感情」「身体的反応」が高まることが明らかとなった。以上の結果から、同世代による犯罪・非行についての報道は中学生のストレス反応に関連することが示唆された。その値がさほど強いものではなかった点に関しては留意する必要があるだろう。しかし、予備調査でストレスや不安を感じた人の割合が決して低くないことを考えると、このようなストレスに関する援助の可能性について議論することは決して意義のないことではないだろう。

パス解析の結果から、「コントロール可能性」からはコーピングを媒介することなく「抑うつ・不安感情」と「身体的反応」へ負のパスが出ていた。つまり、犯罪報道ストレスをコントロール可能だと認知すると、ストレス反応は表出しにくいことを意味している。嶋田(1998)の研究においても、中学生のストレス反応の抑制には、コントロール可能性を高めることが有効であることが示されている。

次に、「犯罪報道ストレス」と認知的評価か

ら、「諦め」へはパスが出ていなかったが、「諦め」からは全てのストレス反応に対して正のパスが出ていた。つまり、「諦め」というコーピングを行うと、ストレス反応を表出しやすいということが考えられる。

さらに、「積極的対処」からストレス反応へ有意なパスが出ていなかったことも特筆される。通常、ストレスに対して積極的な対処を行っていくことは、ストレス反応を低減させると考えられるが、ここでは犯罪・非行の報道というストレスの性質によって、それが十分になされないと考えられる。そもそも報道とは各種メディアが情報を発信することであり、それらを見聞きするという経験は、情報のやり取りという観点からすると一方向的なものでしかない。つまり、ここで受け手が積極的に対処することが報道された事柄に影響を与えることは難しいと考えられる。また、犯罪・非行が中学生にとって問題が大きすぎるために生徒一人の積極的な対処では効果が期待できないとも考えられる。

以上の結果・考察を踏まえた上で犯罪報道ストレスに直面した際の援助について検討してみる。まず今回の結果からは、ストレス反応を抑制するのに有効なコーピングが見出せなかった。しかし、コントロール可能性の認知を高めることによりストレス反応を軽減させる可能性があることが示唆された。嶋田(1998)は、学校ストレスにおけるストレス反応の軽減要因として「ソーシャルサポート」「社会的スキル」「セルフ・エフィカシー」の効果を検討し、これらがコントロール可能性を高め、ストレス反応を軽減しうる可能性を示唆した。また、学校ストレス軽減のためには、ソーシャルサポートの知覚を充実させる、望ましい社会的スキルを獲得させる、不適切な行動から望ましい行動への変容を促す、セルフ・エフィカシーを高く持たせるなどの介入方法が有効な手段であると推測している。そのため、犯罪報道ストレスに直面した際にも、一人で悩み考え、どうしようもないと諦めるよりは、クラスや家庭で話し合い、周囲の意見も聞くことができる場を設けることが有効だと考えられる。また、周囲の大人や教師からのソーシャルサポートの認知を高めることも有効である可能性があるだろう。

### 【今後の課題】

本研究は、北陸地方の中学校一校に対しての調査をもとに行われた。しかし、実際に中学生が関わる事件が起きた周辺の地域かそうでない地域、事件が

つい最近起きたかといったような時期的なタイミングなどによって犯罪報道ストレスに対する認知の仕方に差異が表れることは容易に考えられる。そのためこれらを踏まえた研究が必要とされるであろう。

さらに、援助としてのソーシャルサポートなどの可能性を示したが、本研究ではそれが示唆されたに過ぎず、現段階ではその有効性は立証されていない。よって、今後は具体的な援助の有効性について更なる検討が必要とされる。

### 引用文献

- 池上知子・井上敦史 2002 中学生における生活ストレスと感情反応の関係に関する基礎的研究 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 5, 255-261.
- 加藤 司 2005 ストレス反応の低減に及ぼす対人

ストレスコーピングの訓練の効果に関する研究 - 看護学生を対象に - 心理学研究, 75, 495-502.

警察庁生活安全局少年課 2005 少年非行等の概要 (平成16年1~12月).

Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.

内閣府 2004 治安に関する世論調査.

大木桃代・神田信彦 2000 中学生の問題行動に対する意識とストレス反応に関する検討 人間科学研究 (文教大学人間科学部), 22, 183-191.

嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房.

【付記】本研究におけるデータ収集および分析では、太田知里さん、岡下陽一君、櫻田千早さん、藤江朋美さんの協力を得ました。感謝いたします。

(受稿3月22日：受理5月31日)